

川村 湊著

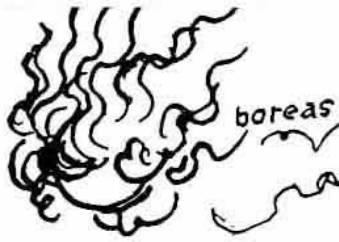
異郷の昭和文学

—「満州」と近代日本—



岩波新書

144



川村 湊 著

江苏工业学院图书馆

異郷の昭和文学

—「満州」と近代日本—

藏书章

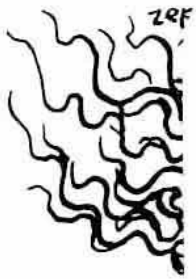
岩波新書

144

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



川村 湊

1951年北海道生まれ

法政大学卒業

文芸評論家，法政大学助教授

著書—「アジアという鏡」(思潮社)

「(酔いどれ船)の青春」(講談社)

「異様の領域」(国文社)

「紙の中の殺人」(河出書房新社)

ほか

異郷の昭和文学

岩波新書(新赤版) 144

1990年10月19日 第1刷発行 ©

著 者 かわ川 むら村 みなと湊

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式岩 波 書 店 会社

電話 03-265-4111

定価はカバーに表示してあります

印刷・精興社

製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

ISBN 4-00-430144-0

目次

序章 釜山から満州へ…………… 1

I 大陸へ——開拓と建国…………… 11

一 〈満州文学〉という夢…………… 12

二 国策と開拓文学…………… 28

三 開拓文学の実相…………… 46

II モダニズムと郷愁——大連…………… 61

一 蝶と海と軍艦…………… 62

二 植民地都市の光景…………… 73

三 郷愁と幻想…………… 80

四 ダーリニ・だいれん・ダーリエン…………… 91

III 偽りと幻の新都——新京…………… 99

一 吹雪の閉域…………… 100

二 幻視の都市・新京…………… 108

三	詩人たちの北方幻想	130
IV	民族の軋み——奉天・ハルピン・蒙疆	139
一	「外地」と文学賞	140
二	二人の植民地人	150
三	鉄路と草原	160
四	国籍のない国	170
V	子供たちの満州——故郷という異郷	179
一	満州少国民	180
二	開拓民の孤立	188
三	逃れ去る国境	205
終章	見えない国境線	219
	満州文学関連年表	

序章 釜山から満州へ

釜山にて

私は一九八二年から八六年までの四年間、韓国の釜山プサンに日本語教師として赴任していた。家族を連れての、私にとっては初めての外国での長期滞在経験だった。釜山という外国の町が、「日本」にとって昔からきわめて縁の深い土地であることを認識したのは、その町に住みつくようになってからのことだった。明治の近代以前において、日本人が公式に外国の町に住むということは、釜山の草梁チヨリヤンにあった日本の在外機関「倭館ウエッゲン」をおいてほかになかった（現在でもこの地には日本総領事館がある）。釜山は日本との交渉、折衝のための出先機関として設けられた町と違ってよく、日本でいえば長崎の出島のような性格の土地と違ってよかったのである。

近代に入ってからからの日本による朝鮮半島および、「満州」の植民地支配の時代には、釜山はやはり日本との交流の玄関口として大きな役割りを果たした。釜山は大陸の鉄路の始発駅で

あり、その終着駅が長春（新京）だった。中国へ、満州へ、大陸へと渡ってゆく人々の群れは、この町の港を降り、この町から汽車に乗って遠く異郷へと運ばれて行ったのである。『日帝三十六年』といわれている間に、朝鮮の町並みは日本式のそれと同じように変えられていった。長手通り、本町通り、南浜町、蓬萊町、緑町……当時の写真を見ると、瓦屋根、格子窓、ガラス戸の商店が軒を並べ、「くすり」や「寿し」や「運送部」といった看板が読める。それらの風景は明治、大正、昭和初期の日本の地方都市のものほとんど変わらない。

日本人が作ったもの

日本人は他人の国にやって来ていったいどんな建物を造り、どんな町をこしらえ上げようとしたのか。それをたどることによって、日本人の精神構造と、私たちが「近代」というものに抱いていた夢の形を知ることができるとは思えないかと、思いついた。韓国のいくつかの都市を歩きながら、私がそこに残された『日帝時代の建物』に目を向けるようになったのは、そうした理由からである。

もちろん、そのことは建物だけの問題ではなかった。私は釜山やソウルの古本屋の棚の隅や、図書館の薄暗い書庫の中に古びた日本語の本や雑誌を見た。それは釜山や京城（ソウル）

や大連や新京(長春)で出された日本語の書物で、半世紀以上の埃を帯びて、ほとんど誰の手にもとられることなく、滅び果てようとしているかに思えた。日帝時代に日本人が、あるいは朝鮮人が朝鮮半島で書いていた日本語の文学。私はそれまでに考えたこともなかった日本の「近代文学」や「昭和文学」に出会い、私たちの文学が、置き忘れして来たものの輪郭がおぼろげながらもつかめるような気になったのである。

ロシア人の造った街の中心には教会が建てられ、中国人の街には遊廓を中心とした盛り場が造られるといわれる。では、日本人はその植民都市の真ん中に何を造っただろうか。答えは、駅、官公庁、軍事施設、そして神社である。釜山の場合、港町という性格から港湾施設が町の中心となるが、それから引き込み線につながる釜山駅。そこから電車路線づたいに本町通りを行ったところに、釜山府庁、警察署、法務院などの官庁街があった。

しかし、釜山の精神的な中心地は、海岸や繁華街を見下ろす小高い丘の龍頭山ヨンドウサンである。その頂上には朝鮮人の民間信仰の祭祀場である国師堂クッサダンがあった。それを撤去した跡地に大々的に建てられたのが、龍頭山神社だった。急傾斜の石段を登ると鳥居があり、木立ちの中に白木の拝殿が現れるという、日本式の神社が朝鮮半島の都市にいくつも造られた。そしてその中心となるのが、「京城」ナムサンの南山の中腹に創建された朝鮮神宮にほかならないのである。

朝鮮王朝の王宮、景福宮キヨンボクケンの宮殿の前に、その視界を遮さえぎるように建てられた朝鮮総督府。「京城」の中心は、まさにこの白亜の総督府の大建築と、長い石段の参道を登る朝鮮神宮であることは、地勢学的に見て間違いのないところだろう。政治的支配と精神的な支配。それはまた、日本の植民地支配における「近代的」なものと「前近代的」なものとの奇妙な癒着でもあったのだ。

古本屋の主人

釜山の宝水洞ボスドンという街に古本屋街があった。私はそこで日本語の本を書棚の隅に並べている古本屋の主人と顔なじみになった。彼は私に日本語で「私の日本語は軍隊で教わった」と語った。「私は満州国で兵隊だった。黒龍江省の蒙古に近い国境地帯に駐屯していた。中国語も、ロシア語もそこで覚えた」といって、主人は私に中国語やロシア語の本を読みあげてみせた。もっとも私にはそれが正しいものかどうか判断のつけようがなかったのだが。

「今度、日本へ帰ったら蒙古語の辞書を買ってきてくれないか」というのが、その古本屋の主人の頼みだった。私は神田の古書店街で蒙古語辞典を捜したが、何万円もする高価なものだった。それで『蒙古語会話帖』という小さな本でお茶を濁したのだが、彼はとても喜ん

でくれた。「満州にいた時、蒙古語を勉強したかったのだが、本がまったくなくてね」といいながら、古本屋の主人は私に奥から大切そうに持ってきた古い「満州帝国地図」を見せてくれた。「私はここにいたんだ」と彼が指さしたのはロシアや蒙古との国境に接する「満州国」のはずれの地域だった。朝鮮語、日本語、中国語、ロシア語、モンゴル語、彼こそまさに「五族協和」の夢を、語学の勉強という形で実践していたのだということに気がついたのは、私が釜山を引揚げてからのことだった。

新京の体験

旧満州国（ウエイマン「偽満」）と現在では呼びならわされている）の首都として建設された「新京」は、日本人が植民地において本格的な都市計画を立て、建設しようとした唯一の例として残されている。私は一九八九年の秋、この都市を訪れて「五族協和」「王道楽土」の「夢の跡」をたどろうとした。

並木というより森の中に道があると思われるような、道路中央に緑地を設けた広々とした直線道路（新民大街）。その両脇に思い思いの姿をした旧満州国の官庁ビルが並び、「満州皇帝」の住むはずだった新宮殿へとつながってゆく。そこらあたりは、まさに「帝冠様式」の

宝庫、あるいは墓場と^いっていいほどの奇妙な建築群が見られる。帝冠様式とは、簡単にいえば西洋風の石造(コンクリート)建築の上に、和様(唐様)の屋根を冠のようにかぶせた建築物のことをいい、日本の軍国主義、アジア主義、アジヤ主義、皇国主義の建築面での反映と見られているものだ。

満州国の新首都の建築物に帝冠様式が多いことは当然過ぎることだろう。満州建国に関わった日本人たちは、そこに西洋の科学文明と東洋の精神文化との融合した、新しい「東亜」の文明、文化を築こうとした。だから、ハルピンや大連の町のような純西洋風の石造建築ではなく、ビルの上に天守閣をのつけたような和洋折衷の建築群に、その精神を体现させようとしたのである。

石柱に支えられた正面ホールの上には、四本の柱に飾られた窓を持つ塔屋があり、その屋根は中国風の反りのある瓦葺きだ。これは満州國務院の庁舎として建てられ、現在は医科大学の一部となっている建物である。新中国らしく、建物正面にはレーニン像が建立されているが、その姿と「興亜様式」ともいわれる建物とのチグハグな様子が、この町の複雑で、入り組んだ近代史を物語っているのである。

映画『ラスト・エンペラー』のロケも行われた満州皇帝・愛新覚羅溥儀アイシンギョロプーイーの仮宮殿は、現在

吉林省博物館となっているが、それに隣接して「偽満博物館」があった。溥儀の一生を写真や資料、文物でたどるとともに、日本軍の満州侵略の過程、弾圧、虐殺、強制労働、拷問といった悪業がさまざまな展示物によって示されている。万人坑の夥しい白骨群、捕えられた抗日パルチザンに対する残虐な拷問と刑罰、生き残る証人たちの体に残る傷跡。

それらは日本人の私にとって決して心穏やかに見過ごせるものではなく、すでに歴史となってしまうこと、過去となった記録にしか過ぎないものと、自分を納得させようとする。しかし、長春の町に今も残る満州国の「興亜様式」の建築群の存在そのものが、そうした時による風化や忘却を許さず、歴史を証言し続けていると思われるのである。

民族のるつば

ハルピンで私を案内してくれたのは、朝鮮族の若い女性だった。松花江ソンファアジヤンを渡る船の中で、私は牡丹江ムータンジンヤンから一人が出て来て、寄宿舎に住んでいるという彼女にこんなことを尋ねた。

日本にいる在日朝鮮人たちは、結婚する時になるべく同族の人たちを選ぶということを知っているけれど、中国の朝鮮族の間ではどうですか。たとえば、あなたなら朝鮮族ではない人、漢民族や満州族の男性と結婚するつもりはありますか、と。すると、彼女はやっぱり朝鮮族

の人を選ぶと思いますと、恥しそうに答えたのだった。

ハルピンは基本的にはロシア人が造りあげた町だ。旧市街、キタイスカヤ通り（中央大街）には、アール・ヌーボー様式の石造建築のホテルや集合住宅や商店が並び、市内の中心にはギリシア正教の教会が建てられている。そこに日本人が入り込むことによって、この町は東漸した西洋と、東洋（中国、満州、日本）とが混在する、複雑で不思議な都市空間を造り出した。“五族”の協和というよりは、いろいろな民族がしのぎを削り合い、てんでにその特色と風俗を反映させた、るつぼのような町といふべきなのだ。石畳の路を歩きながら、私はこの町の駅頭で、“民族の敵”である伊藤博文を射殺した朝鮮人の安重根アンジュンゲンのことを思い出した。日本人、朝鮮人、ロシア人、中国人、満州人、蒙古人、それらの民族がこの町に離合集散した“昭和”という時代のことを思った。そして、その昭和時代のさまざまな遺産は、この街のそこかしこに亡霊のように佇たたずんでいると思われたのである。

おそらく、日本人にとって最も苦手なのは、こうした多様で混沌とした共存、共在の関係だろう。言語も風習も価値観も、てんでに違う民族が、それぞれの文化や風俗を守りながら一つの都市に混在している。それは決して無秩序でもなければ、混乱でもないのだが、日本人の目にはそれが猥雑でアナキーな、恐るべき無秩序、混乱状態として見えてしまうので

ある。一元化した秩序意識、価値の統一された世界こそ、私たちには美的で、心地よいものと見えてしまうのではないだろうか。

もう一つの昭和文学・戦後文学へ

しかし、私たちは日本人が満州国の首都として造りあげようとした「新京」がきわめて和洋や漢和の折衷的なスタイルの混在した、いわばポストモダン的な建築様式の都市だったことに気がついていない。それは一種の混乱や過渡期的な様式を示していると思われたかもしれない。あるいは許しがたい逸脱や野合、でたらめとして批判されることがあったかもしれない。だが、それらが数十年後にあらためて振り返られた時、一つの精神の形、文化の様式をそなえたものとして見られ始めていることも確かなのである。

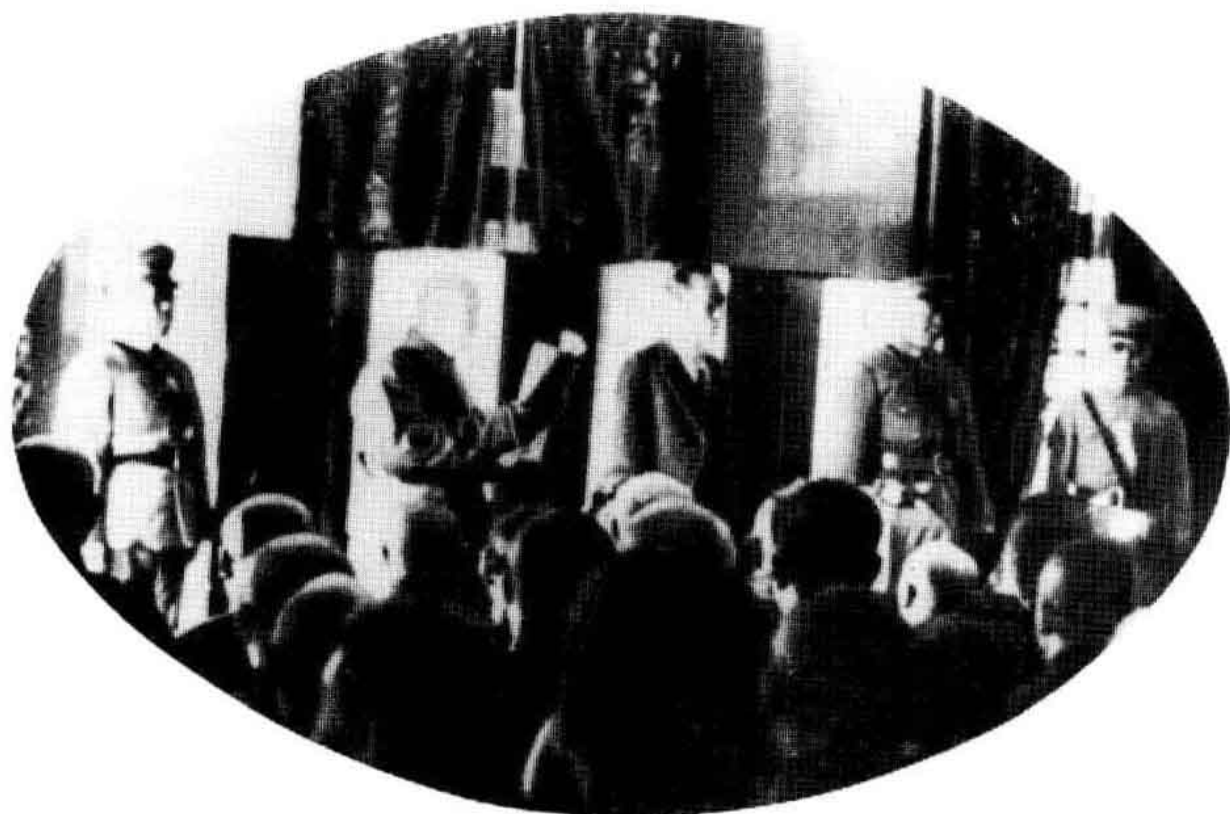
文化や価値観を一元化しようとするのが、日本の朝鮮半島や満州への侵略や、中国の文化大革命のように、ひどい犠牲を払いながら、結果として失敗していることに、私たちはもっと謙虚にならねばならないだろう。多様で多彩で多元的な精神の「複合民族」化が、今こそ必要になっていると私は思わざるをえないのである。

この本は、満州をめぐる日本文学者たちが、何を感じ、何を考え、そうしてそれらの

ことをどんな風に表現したかということをとだろろうとしたものである。朝鮮半島から「満州」へと、私の旅は〈満州鉄道の夜〉を北上してゆくものとなったが、私の中ではこれは常に自分の中の「日本の近代文学」の在り方を問うことにほかならなかった。だから、これはもう一つの昭和文学・戦後文学”についての物語なのである。

なお、最初に注意しておきたいのは、この本の中では本来ならば旧満州国(偽満州国家)、あるいは「満州」(中国東北部)というように、注釈付き、カッコ付きで使わなければならない言葉を、便宜的に満州、満州国、満州人と表記したことだ。これは当時の用語法を活かすためであって他意はない。また満人、満語といった言葉も、当時の文脈や感覚を活かす意味で使ったところもある。新京(長春)、奉天(瀋陽)、京城(ソウル)などの旧地名も同様である。この場合、最初に出てきた箇所において現在名を注記したが、次回からは省略したことをおことわりしておく。また正式には「満洲」と表記すべきところをこの本では「満州」に統一した。引用の場合も同様である。

I
大
陸
へ——開拓と建国



満州国新元首溥儀の就任式